

茨城大学学報

第301号

平成24年2月～平成24年3月



農学部附属 FS センター前の桜の様子

INDEX

- ◆ サバティカル報告会を実施
- ◆ 教育学部附属中学校の三年齊藤さんが文部科学大臣奨励賞・最優秀賞を受賞
- ◆ 農業環境技術研究所との包括的連携協力協定を締結
- ◆ 第1回附属学校フォーラム「地域のモデル校としての附属学校」を開催
- ◆ 照井関東経済産業局長による茨城大学工学部の視察
- ◆ ウダヤナ大学大学院と修士ダブルディグリー教育プログラムの覚書を締結
- ◆ 地域と連携したバイオ燃料の地域連携シンポジウムを開催
- ◆ 平成23年度卒業式
- ◆ 定年退職者等永年勤続表彰式・懇談会を開催

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 教育学部附属中学校の三年齊藤さんが
文部科学大臣奨励賞・最優秀賞を受賞

公益財団法人音楽鑑賞振興財団主催による「第四十四回 音楽鑑賞教育振興 論文・作文募集」（文部科学省後援・パイオニア株式会社協賛）において、教育学部附属中学校（小泉晋弥校長）の齊藤絵理香（3年）さんが、中学生の部の文部科学大臣奨励賞・最優秀賞に選ばれ、2月6日に同校で公益財団法人音楽鑑賞振興財団の河端政夫事務局長より賞の授与が行われました。

作文募集のテーマは『聴いてみつけた音楽の楽しみ』で、齊藤さんは昨年の夏休みに音楽科の選択課題として取り組み、「記憶のスイッチ」という題名で作文をまとめました。音楽を聴く楽しみや、音楽を聴いて得た感動などを素直に表現し、音楽の授業で学んだ内容も生き生きと書かれていた点が高く評価されました。

同校にとって、大変名誉なことであり、今後の音楽教育活動に生かしていきたいとしています。



賞状を手に記念撮影

（前列左から、小泉校長、齊藤さん、河端事務局長：後列左から、岡部正徳教諭、益子道夫副校長）

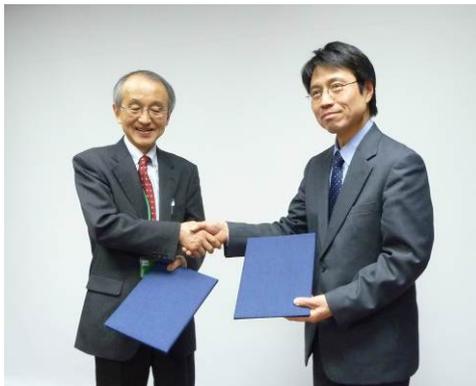
◆ 農業環境技術研究所との包括的連携協力協定を締結

農学部は、独立行政法人農業環境技術研究所と包括的な連携協力に関する協定の締結に合意し、平成24年2月14日（火）農業環境技術研究所で調印式を行い、農業環境技術研究所の宮下清貴理事長と茨城大学農学部の太田寛行学部長が協定書に署名しました。

今回の協定は、研究開発、人材育成等において相互に協力し、推進することを目的とするものです。

挨拶で宮下理事長は「性格、文化の違う大学と研究所の連携は非常に重要だ。これから知恵を絞って、双方に利益がある関係を築いていきたい」と述べ、また、太田農学部長からは「研究所、大学がお互いのメリットを活かしながら、よりよい地域社会を作っていくいいスタートになる」と挨拶しました。

今後、この協定により連携協力を円滑、かつ、積極的に推進するため連携推進協議会を設置し、農業環境に関連する研究領域において共同研究の実施、研究者（教職員）の相互交流、学生の教育研究交流などについて、事業を展開していくこととしています。



握手を交わす宮下理事長(左)と太田農学部長(右)



調印式出席者による記念撮影

◆ 第1回附属学校フォーラム「地域のモデル校としての附属学校」を開催

平成24年2月18日（土）教育学部にて、第1回附属学校フォーラム「地域のモデル校としての附属学校」—大学・学部との連携をふまえて—が開催されました。

日頃、教育学部と各附属学校間での連携協力は活発な本学ですが、このように附属学校が一堂に会して開催するのは初めての試みとなりました。

開催に先立ち、小野寺俊茨城県教育委員会教育長及び池田幸雄茨城大学長が挨拶し、本フォーラムへの期待を語りました。続いて、木谷慎—文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室教育大学係長—による「教員養成大学・学部の改革と附属学校園の役割」と題する基調講演が行われました。

この中で、木谷氏は、附属学校と大学との連携数が茨城大学では全国的にも非常に高い数値を上げていることに触れ、ぜひ今後もこの件数を増やし、他大学の附属学校に負けないものを作っていくとともに、茨城ならではのモデル事業や地域の拠点となるような研究を期待していると述べました。

講演後、池田学長から、「秋入学について議論されているが、これは大学だけではなく、小学校からとらえていくべき問題である。21世紀の激動する社会に適合するシステムが必要」との意見があり、そのためにも現場の附属学校の人的及び財源的に厳しい状況について更なる理解とより一層の協力を求めました。木谷氏は、附属学校が今後も大学と連携し、それらを活かし教育の諸問題を解決する起爆剤となってほしいと語りました。

基調講演後は、村野井均教育学部附属教育実践総合センター長、各附属学校代表者らによる実践報告が行われ、各学校種ならではの報告に、会場に集まった136名の参加者らは熱心に聴き入っていました。

最後に、尾崎久記教育学部長が、今回のフォーラムの成果を次へつないで、今後も教育学部と附属学校の連携を深め、地域拠点校として取組みを積極的に行っていきたいと締めくくりました。



基調講演をする木谷文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室教育大学係長



基調講演終了後の質疑応答で質問する池田学長（右）



基調講演後、各附属学校による実践報告が行われた

◆ 照井関東経済産業局長による工学部の視察

関東経済産業局 照井恵光 局長が、2月22日（水）日立キャンパスを訪れました。

（随行は総務企画部 古郡靖 参事官、産業部製造産業課 伊師秀聡 行政実務研修員）。

はじめに、友田陽工学部長から、平成24年1月に設立した「工学部附属教育研究センター」の経緯等及びセンターの役割について説明がありました。続いて、増澤徹 ライフサポート科学教育研究センター長、伊藤吾朗 塑性加工科学教育研究センター長、大貫仁 グリーンデバイス教育研究センター長、呉智深 防災セキュリティ技術教育研究センター長から、4つのセンターに関する最近の活動状況を踏まえて、今後、社会貢献の拡大を目指すことの説明がありました。

視察後の意見交換会では、地域社会との関係を強化する機能強化等についての活発な意見が出され、各センターで早急に具体的なロードマップを作成して、引き続き交流を深めることとなりました。



視察をする照井局長ら

（左から古郡参事官、照井局長、友田工学部長、伊師行政実務研修員）

◆ ウダヤナ大学大学院と修士ダブルディグリー教育プログラムの覚書を締結

農学研究科は平成24年3月6日、インドネシア共和国のウダヤナ大学大学院とダブルディグリー教育プログラムの覚書を締結しました。

この教育プログラムは大学院修士課程の学生が、茨城大学とウダヤナ大学の双方の大学院に所属し、それぞれの大学における教育を受け、修士論文研究を実施することにより双方の大学の修士の学位を取得するもので、本教育プログラムは本年10月から開始する予定であります。茨城大学農学部とウダヤナ大学農学部は平成16年に学部間協定を締結して以来、国際シンポジウムの開催や大学院における共同プログラムの実施、授業科目「熱帯農業フィールド実習」の共同実施などの活発な相互交流を行っており、さらに、平成21年には大学間交流協定を締結しました。なお、先行して、茨城大学大学院農学研究科では昨年10月より、インドネシア共和国ボゴール農科大学大学院とダブルディグリー教育プログラムを開始しています。

調印式には、茨城大学の三村信男学長特別補佐やウダヤナ大学のマデ・スアストゥラ副学長をはじめとする関係者が出席し、茨城大学の太田寛行農学研究科長とウダヤナ大学のラカ・スデウィ研究科長が覚書にサインをしました。今後両大学の活発な交流が期待されています。



太田農学研究科長(手前)とラカ・スデウィ研究科長



左からデワ・ヌグラ・スプラブタ前研究科長、三村学長特別補佐、太田農学研究科長、マデ・スアストゥラ副学長、ラカ・スデウィ研究科長

◆ 地域と連携したバイオ燃料の地域連携シンポジウムを開催

農学部は平成24年3月13日（火）、阿見キャンパスにおいて『地域と連携したバイオ燃料生産の展望』と題するシンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは再生可能エネルギーの1つであるバイオ燃料に着目し、茨城県内における生産や活用の動きとそれをとりまく社会環境、将来展望について議論することを目的としたものです。シンポジウムには大学や研究機関の研究者、自治体関係者、地域の農家や市民など約120名が参加しました。

農学部新田洋司教授による開催趣旨説明で始まり、阿見町の天田富司男町長から「再生可能エネルギーに対する期待が高まるなか、バイオ燃料の更なる発展には産学官の連携が大事になってくる」、太田寛行農学部長からは「バイオ燃料のこれまでの成果を公開しながら、地域の方々と一緒に次への発展を目指していきたい」との挨拶がありました。

講演では、茨城県農林水産部の西村俊夫氏から「茨城県におけるバイオマスの利活用について」で、県内で取り組まれているバイオ燃料生産の事例が紹介され、阿見町の水間宗氏の「阿見町の耕作放棄地対策について」では、同町内における耕作放棄地解消事業についての報告がありました。日立市の鈴木一兄氏・大塚寧氏の「BDF（バイオディーゼル燃料）化事業の推進：菜の花エコネットワーク推進事業について」では、同市が実践している廃食用油からのBDF生産の現況や菜の花を利活用した事業についての説明があり、かすみがうら市の圓城寺正道氏の「バイオ燃料生産に対するかすみがうら市の取組み」では、同市のバイオ燃料生産に対する今後の方針・展開についての紹介がありました。茨城大学農学部の久留主泰朗教授の「バイオ燃料農業生産を基盤とした持続型地域社会モデル」では、同大学が実施しているバイオ燃料社会プロジェクトの一連の研究紹介があり、東邦特殊パルプ株式会社の原普一氏の「世界初！スイートソルガムから紙の製造に成功」では、スイートソルガム搾りかすからのパルプ・紙の製造工程や製造コストについての説明がありました。



シンポジウムに参加した研究者、自治体関係者、農家、市民の方々

◆ 平成 23 年度卒業式

平成23年度卒業式は、3月23日（金）午前10時から茨城県武道館において、学長、役員等の参列のもとに挙行されました。

式は、本学管弦楽団の前奏に始まり、池田学長から学部、大学院および専攻科の卒業生、修了生の学部等総代に学位記、修了証書が授与され、学長告辞、来賓祝辞、卒業生・修了生総代 鈴木靖弘（工学部）の答辞と続き、最後に参列者全員による校歌斉唱で閉式となりました。

なお、今回巣立った卒業生は、2,135名でした。

◆ 平成 23 年度卒業式告辞

茨城大学長 池 田 幸 雄

ようやく春めいて参りました。梅の花も咲き初めている今日この頃でございます。本日、茨城大学をご卒業される 2135 名の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。また、学生諸君を励ましつつ、ご支援をして下さいましたご家族の方や関係者の方にも、心よりお祝いを申し上げます。



さて、昨年 3・11 の地震は、1000 年振りの超巨大地震と云われております。この巨大地震に引き続いた「平成の大津波」により、多くの尊い人命を失いました事は痛恨の極みでございました。心から哀悼の意を表したいと思います。

私達は、このような悲惨な事態を 2 度と起こさないためにも、今回の「東日本大震災」を

謙虚な気持ちを持って見つめ、その原因を探究し、未来の明るい社会を築く方針を確立する事が、私達に課せられた責務であると思います。

今回の巨大地震や大津波は、想定外の天災だと云われておりますが、必ずしも想定外ではありません。明治から昭和初期までに活躍した物理学者の寺田寅彦は、万能な科学者として有名な先生で、災害等にも深い見識を持っておられました。彼は、想像以上の巨大地震や十数メートルの大津波がある事を予想し、警告を発しておりました。彼は、明治29年の「明治三陸大津波」、大正12年の「関東大震災」、及び昭和8年の「昭和三陸大津波」に遭遇しています。これらは、甚大な災害であり、多くの尊い人命が失われました。寺田寅彦は、これらの災害を科学的に詳しく調査したのみならず、一方でその惨状を随筆集等に記し、一般市民にもわかり易く訴えました。彼は、地震や津波以外にも、台風や洪水や火山噴火や大規模火災などの多くの災害をも調査し研究いたしました。

これらの災害をまのあたりにした寺田寅彦は、日本が「世界の災害国」である事を認識しておりました。彼はこの認識に基づいて2つの警告を表明いたしました。第一は、防災のための研究所を設置して研究を行い、災害を未然に防ぐべき事を提案いたしました。第二には、学校等で防災教育を行う重要性を指摘いたしました。この2つの警告に従って、数々の防災対策が既に実施され、平成の時代には日本の防災は充分であると思われておりました。しかし、今回の平成大津波では必ずしも充分でない事が判明いたしました。

明治三陸大津波の直後には、住民は高台に住む傾向がありましたが、10年、20年、30年と時間が経つにつれ、便利な低地に移行してしまい、その結果、昭和三陸大津波では再び甚大な被害を被ってしまいました。寺田寅彦はこの事を大変悔やんでおります。今回の平成大津波の場合も、町を高台に移す計画があるようですが、以前のケースと同じようになってしまわないでしょうか？寺田寅彦は天国で大変心配しているに違いありません。



「天災は忘れた頃にやって来る」は寺田寅彦の有名な言葉です。この言葉は反語的表現であり、常に心の準備を怠ってははいけないと云う事を意味しています。然るに、今回の

平成大津波による大惨事は、私達が明治三陸大津波、昭和三陸大津波、及びそれ以上の大津波の可能性を忘れてしまった事が原因の 1 つではないでしょうか。東北地方の太平洋岸の町には高い防波堤が張り巡らされておりましたので、ついつい人々の心に油断が生じたものと思われまます。寺田寅彦の言葉を是非思い出して欲しいものです。

また、寺田寅彦は、「災難を正當に怖がる事は難しい」と嘆いています。今回の平成大津波により、福島原子力発電所事故が発生し、現在の東日本は放射能汚染問題が深刻です。放射能を「怖がり過ぎる人」と「怖がらなさ過ぎる人」とに分離して、冷静な議論ができない場合があるようですし、特に風評被害が混乱を助長しています。放射線の専門家は「放射能を正當に怖がらしましょう」と訴えています、なかなか難しいようです。これは、災難に関する国民の相互理解が欠如している事に起因しており、今後の「教育のあり方」に深く関係する課題であろうかと思ひます。

寺田寅彦が指摘したとおり、日本は世界一の災害国です。常日頃から十分な心の準備と実用的訓練を行い、いざと云う時に備えておく必要があります。私達日本人は、常に災害と対峙しており、いかなる災害とも闘う決意が大切です。これが日本に住む我々の宿命である事を肝に銘じて頂きたいと思ひます。



今回の「東日本大震災」は多くの
人々に不幸を齎しましたが、一方で
日本人の良い点も見受けられました。
諸外国では、このような災害に
遭遇すると、一般民衆が暴徒化し、
商店等を襲う事態になる事がしば
しばです。しかし、日本では、今回
そのような暴徒化が全く見られな
いばかりか、逆に、多くの日本人は
須く（すべからく）順番を守り、整
然と行列に従い、我慢に我慢を重ねて
耐え忍んで参りました。また、多くの
日本国民が支援・協力を進んで申し
出ており、積極的に行動する姿が
印象的でした。例えば、被災者を
思いやる若者のボランティア活動は
大変活発で、被災者を大いに元氣
づけてくれました。茨城大学におい
ても多くの学生がボランティア活
動に積極的でした。彼らは困難に
直面している人々に少しでも力に
なりたいと云う純粋な気持ちを持
ってボランティア活動に参加しま
した。私はこれらの学生が「思い遣
りの心」を秘めている健全な若者
である事を改めて認識し、茨城大
学の学生を誇らしく思った次第で
した。日本人の伝統的な美德であ
る「勤勉と我慢と思い遣り」の精
神は、現在でも健全であり、奇し
くも、この「東日本大震災」

を通じて明瞭になりました。

この日本人の健全な心があれば、復興はそれ程難しくはありません。「平成大津波」を契機として、明るくて活気のある新しい日本社会を構築しようではありませんか。これこそが多くの犠牲者に報いる唯一の道ではないでしょうか。この新しい日本社会の構築には、若者の情熱が必要不可欠であり、あなた方の双肩に懸っています。是非とも、諸君に頑張ってもらいたいと願っております。

卒業生諸君は、社会に出て新たな人生を始める人や、大学に残って勉学を続ける人など、様々な進路に向かおうとしています。あなた方は、今までに茨城大学で培って来た実力を糧とし、希望に燃え、努力を旨として、それぞれの分野で頑張ってもらいたいと思います。



最後になりましたが、茨城大学は皆さんを今後とも応援し続けます。卒業生諸君の健康と今後の活躍を心から期待いたしまして、学長告辞の結びといたします。本日はご卒業、本当におめでとうございます。

◆ 定年退職者等永年勤続表彰式・懇談会を開催

平成23年度の定年退職者等永年勤続表彰式が平成24年3月30日、事務局第2会議室で行われ、役員、副学長出席のもと、池田学長から被表彰者一人一人に表彰状が手渡されました。



永年勤続表彰式後の記念写真

被表彰者
(50音順、敬称略)
上野 よし子
久保田 朋次
鈴木 敏行
田中 正夫
飛田 実
畠山 輝敏
武藤 邦弘
以上7名

定年退職者等永年勤続表彰とは、永年にわたり本学に勤務し、定年等により退職される附属学校園教員と職員を表彰するもので、本年度の被表彰者は7名でした。表彰式においては、池田学長から祝辞として、永年の労へのねぎらいと、退職後の新しい生活での活躍への期待が述べられました。



懇談会の様子

表彰式に引き続き、退職する教員を交え、昼食を取りながら懇談会が開催され、記念品が贈られました。

役員、副学長からも祝辞をいただき、また、各退職者からの挨拶が行われるなど、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。



挨拶する白井元理事・副学長